

# 最初の悲哀

竹久夢二

青空文庫



街子まちこの父親は、貧しい町絵師でありました。五月ごがつのぼり幟の下絵や、  
稲荷いなり様の行燈あんどんや、ビラ絵を描かいて、生活をしているのでありま  
した。しかし、街子はたいそう幸福でした。というのは、父親は  
街子を、このうえもなく愛していたし、街子もまた父親を世の中  
で一番えらくて好いい人だと思っていました。母親が早くなくなつ  
たので、街子は小学校を卒業すると、家うちにいて、父親のため朝夕  
の食べものをつくったり、洗濯をしたり、夜おそく父親が仕事を  
するときに、熱いお茶を入れたりしました。家の外を風が吹くよ  
うに、貧しいことなどは、ちつとも苦勞ではありませんでした。

父親も街子も、ほんとに幸しあわせ福せうそうでありました。

何よりも好よいことに、街子は父親の仕事を好きならばかりでなく、父親の技ぎりよう倆を尊敬さえしていたことです。

ところが街子にとって、容易ならぬ悲かなみが一つ出来たのであり

ます。それは稲荷様の祭の日のことでありました。毎年の習ならいで、

ことしも稲荷いなり様の境内から町内の掛行燈かけあんどんの絵は、みんな街子まちこの

父親が描かいたのです。地口行燈と言つて、おどけた絵に川柳など

添えてかいてあるもので、通る人は一つずつそれをよんで見て喜

んでいました。仕立おろしのセルをすらりときた若い奥様に、

「どうだ、愉快だね。こんな風な絵は国宝だよ」そう言つて見て

ゆく旦那だんな様もありました。

街子はそれをきいてこのうえもなく幸しあわせ福で、「それはあかし

の父さんが描いたんですよ」そう言いたいほどでした。

ところが街子とおんなじ年に小学校を出て、いまは女学校へ上あがっているお友達が三人、やはり地口行燈のまえに立っていました。街子はなつかしくて傍そばへよつてゆきました。するとその時、三人はどつと笑い出しました。

「なんて古くさい絵でしょう」

「馬鹿ばかにしてるわ」

「この眼めはどうでしょう」

そんなことを言いながらまたころげるように笑っていました。

それを聞いた哀れな街子は、人の影へかかれるようにしながら、家うちの方へ駈かけ出しました。それが街子の最初の悲かなしみでありました。



# 青空文庫情報

底本：「童話集 春」小学館文庫、小学館

2004（平成16）年8月1日初版第1刷発行

底本の親本：「童話 春」研究社

1926（大正15）年12月

入力：noir

校正：noriko saito

2006年7月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。



# 最初の悲哀

竹久夢二

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>